

震災からの復興活動に取り組むリーダーを、
短期・中期・長期の3つのフェーズで支援します

震災復興リーダー支援プロジェクト

Support our Disaster Recovery Leaders - Relieve, rebuild and re-start Japan

Contents

経過報告レポート (2017.3.12-2018.3.11)

- P.1-4 未来意志を持つための「希望学」入門
- P.5 東北オープンアカデミーカンファレンス開催
- P.6 石巻市地域おこし協力隊×右腕プログラム
みちのく復興事業パートナーズ
- P.7 気仙沼地域おこし協力隊
- P.8 福島県浪江町、人口ゼロからの挑戦をサポート
- P.9 熊本復興右腕プログラム
- P.10 プロジェクト進捗/ご支援ご寄付のお願い

1 未来意志を持つため「希望学」入門 ～みちのく復興事業パートナーズレポート～

「みちのく復興事業パートナーズ」は2012年6月にスタートした、東北で活躍する起業家やNPO・団体などを企業が協働で支えるプラットフォームです。先日は今年で6回目となる、これまでの活動やこれからについて考えるシンポジウムを開催。今回は、今後の地域のあり方について考えるべく「未来意志」をキーワードに設定しました。「未来意志」はどのように生まれ、どうしたら維持していけるのか？

●新たな希望を見出すために今できること

—東北のリーダーを支援する、みちのく復興パートナーズ
みちのく復興パートナーズとは東北が自律的な復興を目指すために、復興に資するハブ的なリーダーの活動を支え、彼らの影響力を拡大していくためのプラットフォームです。いすゞ自動車株式会社、花王株式会社、株式会社ジーシービー、株式会社電通、株式会社ベネッセホールディングスという5つの企業がつながりながら、活動を展開しています。

みちのく復興事業パートナーズとは

- 東北の自律的な復興の流れを支えることを目指し、企業コンソーシアムとして2012年6月に設立。
- 地域の復興を牽引する東北のリーダーたちを支援することを中心に活動。

みちのく復興事業パートナーズ
右腕プログラムのプラットフォーム活用



NPO法人エディック
右腕プログラム
右腕人材250人 派遣先119件



5つの参画企業の皆さんは、教育やものづくり、福祉などそれぞれの強みをお持ちです。プラットフォームとして横のつながりを持ちながらも、各企業ならではの資源を生かした個別の活動も東北で展開しています。東北の復興に対して、どんな思いを込めて向き合っていくか考えることがパートナーズの目標です。みちのく復興パートナーズは、常に向かう先や目的を共に進化させながら向かってきました。

連携の取り組み

事業ブラッシュアップ・プログラム
団体の事業戦略をブラッシュアップする“場”を提供



個別の取り組み

パートナーズのプラットフォームを活かしながら、企業の持つ人材、専門性、ネットワーク等を活用した取り組みを実施。



東北の現状や企業の関わり方のヒントを社会に発信 (みちのく復興事業シンポジウム)



—「復興とは何か?」という問い

東北に向き合うことに携わる者として考えさせられるのは、“復興とは何か?”という問いです。東北の復興に携わることは、私たち自身が成長する学びの機会になっています。復興に携わる側が進化していく気づきが、これまでにたくさんあったのです。復興に向けて、人口減少の問題やインフラ整備の問題、資金不足などのさまざまな具体的な課題もあります。その解決のためにKPIを定めて進む復興も大切です。しかし同時に、その先にある、本当の意味での“地域の人たちにとっての復興”についても考えたい。そのとき、僕らのあいだで“未来意志”という言葉がでてきたのです。僕らは、東北での活動を通して、“新しい未来をつくる”というクリエイティブな取り組みに関わっていると考えています。未来への意志や、希望の育まれる土壌をいかにつくるか?ここからさらに未来を考えていく上で、しっかりと“共に作りあげる未来”について考える機会を持つべきなのではないかと考えます。

昨年末、ETIC.では、新しい社会をつくる力"未来意志"を持ち、実践するイノベーターたちの活動を促進するプラットフォーム"社会課題解決中マップ"をオープン。社会課題をチャンスと捉え、ポジティブに次の社会をつくらうとするアクションをたくさん紹介しています。そんな"未来意志"を持ち、新たなイノベーションを生み出していくためのエネルギーはどのように育まれるのか?あらためて"未来意志"や"希望"について考える、玄田先生による基調講演の様をお伝えします。

今あらためて「希望」とは? "幸福"や"夢"との対比から

ー2011年の被災地への訪問、支援物資は大量の卓上カレンダー

10年ほど前から希望学の研究をしています。2000年に村上龍さんが『希望の国のエクソダス』という本を出しました。そこに「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」というフレーズがあり、当時非常に話題になりました。こんな社会だからこそ、どうしたら希望が生まれるのか?ということを考えたい。そんな思いから、希望学を研究してきました。

今日のテーマは、**新しい社会をつくる力としての"未来意志"**です。私自身はどういう時に"未来意志"を感じたかと考えてみると、やはり東北のことが浮かびます。私は希望学の研究を通じて、2006年から岩手県釜石市とかかわってきました。震災が起きてから、やはり、すぐにも行きたいと思いました。3月末くらいから、羽田空港から花巻便への臨時便がでて、幸いなことに、4月1日に行けることになりました。せっかく行けるなら何か少しでも支援になるようなものを持っていきたいと思しました。けれど食料や衣料はかえって迷惑になる可能性もあるし、何がいかと困っていたところ、たまたま知り合いから"これ持っていきといはよ"とたくさんの卓上カレンダーを渡されました。

ー希望とは、意志を持って自分でつくるもの

紙袋いっぱいのカレンダーを手に、釜石に到着するといろんな知り合いに会いました。"希望を持ちましょう"、なんて言えませんでした。会う人会う人に、ただ握手をしていました。もう、そのときは、言葉ではありませんでした。ある避難所に着くと知り合いの市役所の方に会えて、少しだけお話しすることができました。そこで紙袋いっぱいのカレンダーを渡したのです。その後東京に戻ると、釜石の方から"あのカレンダー、相当喜ばれていたよ!"と連絡をいただきました。本当に、とても喜んでいただけたようなのです。そうか、こういうものが必要だったんだな、と感じました。

きっと"ここまでにはこれをやるぞ!"とか、"これを目標にするぞ!"とか、自身の手で一つ一つそのカレンダーに書き込んでいったのではないかと想像しています。震災後の混乱や絶望の中で"これから何をするか?"という、明日からの、これからの行動を考えることは、すなわち"希望"につながるんだと。**希望とは、意志を持った自分たちの手で1つ1つ生み出していくもの**なんだと、あらためて実感しました。

ー"ずっと続いてほしい" 継続や持続を思う「幸福」

希望学といっても、国内はもちろん外国の研究を見てみても、10年前に希望について研究している事例はほとんどなかったんです。そこで、いくつかの類似概念と希望との関係を考えました。まずは"幸福"という言葉。希望と幸福の関係や違ってなんでしょう?おいしいものを食べてるときなんかは幸せを感じます。"こういうのがずっと続いて欲しいなあ"と。また、結婚式の披露宴なんかに行っても"ずっとこの二人で仲睦まじくいたい"なんて思う。幸福とは"継続"や"持続"という概念と相性がいい気がしています。その一方で、**希望は、"変化"と相性がいいのだと思っています。"変えていくんだ"、"変わっていくんだ"、という思いとの相性がいい**ようです。

困難な状況だから生まれる、未来への意志

ー"こうなったらいいな" 変化を起点にする「希望」

希望が変化と相性がいいことの、具体例を挙げてみましょう。私はたまに、まちづくりの取り組みに呼ばれ、住民の皆さんと地域のこれからについて一緒に考えたりします。まず"この地域で変わらずずっと守り続けていきたいものはなんでしょう?"と住民の皆さんに問います。すると、自然や伝統、人柄、文化・なんて意見がたくさん出てきて、結構盛り上がりします。次に"地域で変わっていったほうがいいものや変えたいものはなんですか?"と聞いてみると、あまり盛り上がりません。今のままで満足という人もいれば、もう無理だよと諦めている人もいます。

"じゃあ、今、暮らしていて困っていることはないですか?"と聞くと、ポツポツと意見が出てくることがあります。さらに「困っていることに対して、ちょっとでも変わるといいなってことはありませんか?」と促すと、もっと意見が出てきたり。「その困っている状態から、ほんのちょっと困らなくなる状況をつくるために、みんなで何かやりましょう」と考えていくことができます。つまり、**なにか困っている状態から希望が生まれるのではないかな**と私は思っているんです。

もう一つ、"夢"と希望の関係も考えてみましょう。この2つはな何がちがうのでしょうか?まず夜に見る夢は、潜在的な無意識なものが出てくると言われます。また、会社の社長さんやアスリートの皆さんは、メッセージとして"夢を持つ"ことの大切さについてよく発信をしています。夢は、ある意味では理由なく湯水のように湧き上がってくる、エネルギーのような特徴も持つのだと思います。希望はちょっと違うんです。

ー「希望」と「水俣」の関係

さらに希望について考えを深めていくために、以前、明治から大正以降、新聞記事などでの"希望"という言葉の使われ方を調べてもらったことがあります。そのとき、希望と一緒に一番使われていた言葉で多かった一つが"**水俣**"だったことを知りました。水俣は、公害被害で絶望的な状況を経験してきた地域です。そこでこそ"希望"という言葉がよく使われていたようなんです。

どうやら**希望の背景にあるのは、多くの場合、試練とか困難、挫折**といった状況のようなのです。言い換えれば、苦しみ乗り越えようとするのが、希望なんじゃないでしょうか？私は、希望とは夢のように無意識に持つものではなく、意識的に持つものだと思っています。今が苦しいからこそ未来を見出したい。今日の苦しさを明日はほんの少しでも和らげたい。そんな未来への意志をあらわす言葉が、希望なのだと思っています。なので私は、東北だからこそ、福島だからこそ、見出せる希望が必ずあると思っています。

一多くの困難を乗り越えてきた釜石という場所

釜石は、明治の津波でも、昭和の大津波でも大変な被害を受けましたし、終戦の直前に艦砲射撃を受けたことで、多くの方が亡くなっています。2006年から釜石に関わった理由は、困難や試練を受けてきてもなお希望を紡いできた釜石から、希望をつくることについて学びたいと思ったからです。ですが、はじめから地域の方々に受け入れられてきたわけではありません。「東大さん」と呼ばれたりして距離もありましたし、「俺たちの街に希望がないとでもいうのか？」と言われたり。結構風当たりは強かったんですね。ですが、いろいろとじっくり地域の方々と話しているうち、ある方からこんなことを言われました。

“希望なんてものは考えたこともないし、わからん。だが自分の経験から一つだけ言えることがある。「希望に棚からぼたもちはない」ということだ。今、希望が与えられないとか、誰も希望を与えてくれないとかいう人がいると聞か自分が自分には信じられない。希望なんて、あるとすれば、動いて、もがいて、ぶち当たるものだ。それが希望じゃないか？”

私は、非常に非常に、この言葉に胸を打たれたことを覚えています。それから、未来の意志や希望とは、心持ちだけでなく行動や試行錯誤が伴わないといけなのではないかと、考えるようになりました。**意志と同時に行動すること、試行錯誤をすること。これがとても大切な**のではないかとことです。

「行動」がカギとなる、希望の4つの柱とは？

一動いて、もがいて、ぶち当たる。

たまに中高生のみなさんにも希望学についての講座を持ちます。その時はよく、希望の四つの柱について話します。柱の一つは“wish”。まず強い気持ちを持つこと。だけどそれだけじゃなく、“something”も大事。つまり具体的な「何か」に思いを込めること。いろんなやりたいことはあるけれど、これだけはなんとかしたい！ということに思いを込めることが大事なのだ。さらに、“come true”という実現の可能性を諦めないことも重要です。まずはこれら3つの柱、つまり“Hope is a Wish for Something to Come true”が大切だという話をします。

でも3つだけでは何かが足りない。四つの柱のうち、最後の一つは、**by action!**希望には、必ず行動が伴うものなんだということ。だ

から**“Hope is a Wish for Something to Come true by Action!”**なんだと。希望をつくるには、動いて、もがいて、ぶち当たる必要があるのだということを伝えています。



一どうしたら希望を持ち続けられるか？

“絆”という言葉が震災後よく使われるようになりましたね。英語に訳すと、bondがまずでてきますが、tieを絆と訳すこともあるそうです。このtieには、社会学では、2つの意味があるらしいんです。

1つは**“ストロングタイズ”**です。直訳で、強い絆です。この言葉のイメージは、いつも一緒にいて結束してスクラムを組んで、日々頻りに話し合っ、ずっと一緒に頑張る・・・というようなもの。例えば幼馴染で地域のために頑張ってるとか、机並べて一緒に頑張っている、とか。

もう1つは、**“ウィークタイズ”**です。弱い絆、ゆるやかな絆と訳されています。この関係の場合は、会う頻度も必ずしも多いわけではなく、そんなにいつも一緒にはいられません。比較的遠い世界にいる同士です。それぞれの失敗・成功などの体験も違うし、そもそもやってることも違っていたりします。お互いに一定の距離があるけれど、それでも信頼でつながっている関係のことが、緩やかな絆です。たまにしか合わない関係だけど、だからこそ信頼しいろんなことを率直に話し合えるという関係ともいえます。背景も共有体験も違うので、たまには話が合わないこともあるでしょう。でも、諦めないでゆるやかな関係を続けていくと、ふとした時に“なるほど!”という新しいひらめきの生まれる瞬間があるものです。ゆるい関係性だからこそ、まったく新しい気づきが訪れるときがあるんです。

そこから“よしやるぞ”という希望を見出せる。日本は地縁や血縁、会社の縁といった文化が強いので、“ストロングタイズ”の絆のイメージが先行しますが、希望をつくるためには、同時にゆるやかな絆であり、新しい発見を得られるウィークタイズも持つことも大事なのです。実際に、震災の後の釜石の人からも、やっぱりこの2つが大事だね、と言われました。絆という何気なく使っている言葉の中にもヒントがあるのかもしれない。

“人口減少”という課題をどう捉えるか？

ー地域全体に希望が生まれる、「希望活動人口」の可能性

地域にとって、人口減少が一つの大きな課題と言われています。でも単に課題なのか?とも思っんです。

住民の人口数も大事ですが、“希望活動人口”という捉え方もあるんじゃないかと考えています。地域には、これだけはやろう!と思っ行動をしている人がいます。これからは、なにかしら地域に希望を持ち、かつそのために行動している人たちの希望活動人口も大事なんじゃないかと思っます。

5万人の街で、希望を持って活動している人が1000人だけだったとします。仮に、のちにその地域の人口が減少して2万人の街になってしまったとしても、反対に希望活動人口の5000人に増えたとすれば、地域としては案外生き残っていけるんじゃないかと思っんです。全体の住民の数も大事ですが、地域でどれだけの人が希望を持って活動しているのか?という視点も同時に持つてほしいと思っます。直観ですが、福島では、震災後に希望活動人口は増えているような気がします。

ユーモアの力

ー希望を持ち続けるために

とはいえ、世の中には様々な困難なことが待ち受けていますね。そんな中、ずっと希望を持ち続けるためには、ユーモアってものすごく重要なのではないかと思っます。以前ある歌手も「どうしようもない絶望的な状況でできることの唯一のことがユーモア」と言っていました。

『新明解国語辞典』(三省堂書店)では、ユーモアを“**社会生活(人間関係)における不要な緊迫を和らげるのに役に立つ、婉曲表現によるおかしみ**”と書いてあります。日々の暮らしで不要な緊迫が高まることはあっても、和らげるこっってなかなかないですよ。だから婉曲して回り道したっていいじゃないか、おかしみがあってもいいじゃないかという姿勢、すごく好きです。希望を維持していくためには、ユーモアを忘れずにやっていこうよ、という姿勢も大事じゃないかなと思っます。



カンファレンス開催



2017年10月29日（日）に、第3期目となる東北オープンアカデミーのカンファレンスを開催いたしました。おかげさまで、台風も直撃する中、東北からのゲストも含め50名ほどの皆さまにお集まりいただきました。

第一部では、鈴木素雄氏（株式会社河北新報社 常務取締役編集担当）、近江弘一氏（株式会社石巻日日新聞社 代表取締役社長）、高橋博之氏（NPO法人東北開墾 代表理事、「東北食べる通信」編集長）の3名による熱いパネルディスカッションが繰り広げられました。こちらの場では、特に河北新報の鈴木常務にお越しいただいたこともあり、これからの東北を「東北スタンダード」というメッセージを発信することで問いかける場となりました。

◆社説：河北新報創刊120周年より
http://www.kahoku.co.jp/editorial/20170117_01.html



第二部では、第一部での熱気も冷めやらぬまま、各地のオーガナイザーを中心に問題提起されたテーマと自身の関心を結び付けて、今後のアクションプランに結び付ける場となりました。

「人口ゼロの町 浪江町での加点法での挑戦」、「地域商社を立ち上げる洋野町での取り組み」「TOUHOKU LOVERSという地域とのつながり方」など、すでに挑戦を始めている先人の言葉を受けて、それぞれの立場や想いに沿って、思考を巡らせたり、一步を踏み出す準備をされているように思われました。

実際に、「フィールドワークに参加したもののこれからどうつながっていくかと思っていたが、この場でまた新たな繋がりができてよかった」「小さな範囲でも東北に関わり続けていこうと思った」などの声も多く聞かれました。

東北オープンアカデミーは、緩やかではありますが確かなネットワークを丁寧に築いていくことで、引き続き東北への何らかの想いをもつ皆さまの挑戦を応援させていただくとともに、ご一緒にできればと考えております。



● 東北オープンアカデミーとは

東北オープンアカデミーは、震災をきっかけに数多くの地域課題に取り組んでいる東北をモデルケースにし、「新しい働き方」や「地方の未来」に関するアイデアとアクションを共有する、学びと実践の場です。所属や立場の垣根を越えた多様な人がフィールドワークに参加して、各現場で先進的な取り組みやそれを実行するリーダーの思いを学びます。

フィールドワークで実生活や将来にも役立つ気づきを得た後は、定期開催されるイベントやセミナーを通して、地域との関わりを継続し、学びを実践するための仲間探しを応援します。第2期となる今年はフィールドワーク先を昨年の岩手・宮城・福島の3県から東北6県全域に広め、開校。各地で20フィールドワークを開催し、115名が参加しました。

3

「石巻市地域おこし協力隊×右腕プログラム」始動！

周辺エリアを含め50人以上の右腕が参画した宮城県石巻市で、地域おこし協力隊の精度を活用した「右腕プログラム」が始まりました。行政との連携による右腕プログラムの実施は気仙沼市に次いで2箇所目です。今年度は、右腕受入先の公募に合計12団体から申請があり、5団体が採択となりました。

＜採択事業者とプロジェクト名＞

●一般社団法人日本カーシェアリング協会／

地域の寄付車を活用して石巻の半島沿岸部の観光を後押しする。

●株式会社田伝むし／

ササニシキ農家と一緒につこう！「農を中心とした地域おこし

●一般社団法人WE ARE ONE北上／

コミュニティナース 住民の一番近くで・日々へ寄り添い・健康とヒトをつなぐ

●株式会社海遊／

「雄勝」の豊かな地域資源「牡蠣」を世界に発信し、地域に賑わいと雇用を生み出す！

●公益社団法人みらいサポート石巻／

東日本大震災の教訓を伝え、未来の命を守るための新しい挑戦を仕事にしませんか？

このうち、一般社団法人日本カーシェアリング協会には、石巻市地域おこし協力隊第1号となる石渡賢大さんが9月に着任し、吉澤代表の右腕として、レンタカーで半島部の商店で飲食や買物をするとレンタカー代がキャッシュバックされる「地域おこしレンタカー」を立ち上げています。

また、石巻市と連携して起業型人材の育成や、地元発ベンチャーの事業成長を支援する「ローカルベンチャー推進事業」を担う、「コンソーシアムハグクミ（一般社団法人ISHINOMAKI2.0、合同会社巻組、一般社団法人イトナブ、一般社団法人石巻観光協会）」と連携し、右腕がより挑戦の機会を得られるよう伴走し、創業準備、事業成長支援までワンストップで行えるようになりました。

4

みちのく復興事業パートナーズ 事業ブラッシュアップ・プログラム



みちのく復興事業パートナーズ(*)とNPO法人ETICは、東北で地域のハブ的な機能を担う団体を対象に2017年9月から2018年2月の6ヶ月に渡り、事業ブラッシュアップ・プログラムを開催した。プログラムには、岩手からKitasanriku Local Hub、宮城から一般社団法人はまのね、福島から一般社団法人おむすび、一般社団法人葛力創造舎、ふるさと豊間復興業議会の5団体が参加した。

また3月6日には「みちのく復興事業シンポジウム」を開催した。今回で6回目となるシンポジウムは、昨年から本格的に帰還が始まった福島にフォーカスを当て、「未来予測よりも未来意志」をテーマに、福島で活動している団体の代表らが集まり、それぞれ目指しているビジョンを発信した。シンポジウムには企業のCSRや地方創生の担当者らを中心に約140人が参加した。

* みちのく復興事業パートナーズ（事務局NPO法人ETIC.）

企業が連携して東北で活動する復興リーダーを支えるプラットフォーム。いすゞ自動車、花王、JCB、電通、ベネッセホールディングスの5社が参画している。（2018年3月時点）



5

「気仙沼市地域おこし協力隊」活動中！

気仙沼市では、2016年より「気仙沼地域エネルギー開発株式会社」「気仙沼まち大学運営協議会」「一般社団法人気仙沼地域戦略」「気仙沼水産資源活用研究会」「一般社団法人まるオフィス」の5つの団体で地域おこし協力隊の募集を開始し、計9名の地域おこし協力隊が活動を始めました。

いずれも、震災復興過程のこれからの地域を支える基幹産業と位置付けられる団体であり、団体内で右腕人材として事業を支えるとともに、今後地域の産業を支える人材としての活躍を期待されています。隊員は地域づくりを学ぶ大学生から社会人キャリアを積まれた方、個人事業主として活動されていた方まで多様ですが、各々が参画している事業を通し、3年後の自立に向けて、自身が気仙沼市の中でどのような役割を果たすかを見つめ活動に取り組んでいます。

また、気仙沼市全体でも、市内の「やりたい」という思いを持つチャレンジャーを応援する取り組みに力を入れており、彼らもチャレンジャーとして、またチャレンジを後押しする一人として、新しいコトが生まれる地域の風土をつくる一員としての役割も果たしています。



6 福島県浪江町、人口ゼロからの挑戦をサポート

福島第一原発から北へ7kmに位置する浪江町では、原発事故により21,000の全町民が強制避難を余儀なくされてから丸6年が経過した2017年3月31日に、除染が完了した2割の地域が避難指示解除を迎え、新しいまちづくりが始まりました。民間の力を活用すべく、町の出資により、2018年1月にまちづくり会社「(一社)まちづくりなみえ」を設立。それに向け、さまざまなセクターの方々を交えた戦略会議や立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科と連携したりサーチラブによる現地訪問などを経て、社員および地域づくコーディネーター募集をご一緒しました。

意見交換を始めた当時の居住人口は194名(2017年4月末現在)。震災当時の人口と比較し1%にも満たなかったものの人口ゼロだった地域に人の暮らしが蘇った時でした。

この「まちづくり会社」のミッションは、住民コミュニティを再構築すること、そして町のにぎわいを取り戻すこと。

避難によりももとの住民自治・コミュニティが壊れてしまった中で、住民の声を丁寧に、かつ迅速に拾うには、中間支援として地域に根差した住民主体、あるいは官民協働の動きが必要だということで設立が決まりました。目指しているのは、『再生』とも『復興』とも違う、『浪江のまちづくり』と、立ち上げ人の一人である役場職員、菅野孝明さんは想いをこめて言います。

菅野さんは隣町の川俣町出身で、震災をきっかけに20年勤めた東京を離れ、ETICの「右腕プログラム」をきっかけとして浪江町に飛び込みました。6年の全町避難を経たまちづくりは、極めて困難なはずですが、「まちの人と、そこに興味を持った仲間と、とにかく思う存分にやっていきたいです。自分のやりたいことをこのまちならできる、チャレンジできる風土を活かしたいんです。1人1人がこの町でやりたいということを実現するのを大切にしたいですし、失敗しても諦めずにやり直せばいい、そんなムードが浪江にはあると私は感じています。今ここに、不便を承知で戻ってきた人たちの意思、ポジティブな想いがあるからこそこの可能性もきっとあると思います。」

共にまちづくり会社を立ち上げている菅家清進(かんげ・せいしん)さんも前向きに言います。「普通に考えればそりゃ厳しいと思いますよ。でも私は避難先から浪江町に戻り、諦めないことを選んだ。ゼロになったならイチに戻せばいい。諦めなければ最後は必ずなんとかなります」と。

これから本当にまちづくりができるのかという問いは彼らには通用しません。この町に関わる人が自問するのは、信じるか信じないかではなく、諦めるか諦めないか、なのです。



まちづくり会社のメイン事業として、交流と発信の拠点であり、道の駅を兼ねた施設のオープンを2020年に計画しています。

ここでは地元の水産物・農産物の販売、元々地元にあった酒作りの再開などを狙うとともに、町民交流および町内外の交流を活性化するための様々なイベントを企画・実施する予定です。元々浪江には飲食店が多く、町の外から食べに来る人が多かったため、その味を再現し、浪江に「あの味」を食べに行きたいという人に足を運んでもらう仕掛けも考えています。

多岐にわたるまちづくり会社の事業を立ち上げながら、菅野さんは「ここで忘れてはならないのは帰還困難地域です」とも言います。「浪江町だと誇れるようになるには、帰還困難地域が全て解除されてこそ。2020年の道の駅オープンをマイルストーンとして、本当の「帰町宣言」ができるまで、たとえ長い年月がかかっても、この想いを繋いでいきます。」と2020年、そしてその先に見ている、浪江のまちづくりに賭ける想いを語っていただきました。

丸1年経った2018年4月末現在は729名。まだまだ5%にも満たないながら、毎月20人を超える人口が増えています。

他にはない独自の流れを作っている浪江町では、町や行政だけでなく、企業や団体とも協働していくべく、積極的に発信をしています。今はとにかく、ゼロからのスタート。

元々あったまちが、これからまちづくりをするとはどういうことなのか。そして私たちは、注目を集める2020に世界に何を伝えることができるのか。浪江町の挑戦、私たちも応援していきます。

関連記事: <https://drive.media/posts/18429>

7 熊本復興右腕プログラム



熊本地震から1年半以上が経過し、熊本の生活は毎日1歩1歩、復旧しつつあります。

ですが、風評被害による観光や農業など産業へのダメージはまだまだ深刻で、回復の目途が立っているとは言えない状態です。

一方で、観光復興や新たな産業創出を実現させようと、復興リーダーたちが課題解決までの歩みを進めています。

「観光×農業」という新しい分野で、新しい農業経営スタイルを仕組み化することを目指す農家、阿蘇さとう農園。

地震で6割まで落ち込んだ入込数を戻し、将来に向けて新たな顧客やサービスを確立させていこうと取り組む黒川温泉観光旅館協同組合の組合長。

地震で練習拠点をなくしながらもチーム一丸となりリーグ昇格を目指し、さらにはバスケットボールを軸にした子どもや地域の交流の拠点を新たに創出することを志す「熊本ヴォルターズ」のフロント。この1年、皆様のご支援のもと、そんな復興リーダーの取り組みを支援することに注力しました。

3プロジェクトを組成、3名の右腕がマッチングし、現場で力を発揮してくれています。

熊本の産業復興はまさにこれからが正念場です。「熊本復興・右腕プログラム」は、引き続きチャレンジを続けていく熊本のリーダーたちに伴走し支援することで、その挑戦を加速させていけたらと考えています。



熊本の産業復興はまさにこれからが正念場です。

「熊本復興・右腕プログラム」は、引き続きチャレンジを続けていく

熊本のリーダーたちに伴走し支援することで、

その挑戦を加速させていけたらと考えています。



【参考：昨年掲載文】

4月15日の熊本地震から、早くも5カ月の時間が過ぎました。「熊本復興右腕プログラム」として、一般社団法人フミダスと共に、復興リーダーの元へ3名の右腕人材を送り込みました（株式会社南阿蘇ケアサービスへ1名、西原村復興災害ボランティアセンターへ1名、益城避難所へ1名）。現在も活動を続けています。

また、引き続き、2事業体で右腕人材を募集中しています。

南阿蘇観光PR事業実行委員会では、震災の影響で村内に売れ残ってしまった農産品の売り先開拓を進め右腕を募集、株式会社くまもと健康支援研究所では、仮設住宅に入った高齢者の生活不活病を防ぐ「くまフェ」の運営マネージャーを募集しています。が熊本全体に広まってきました。これからは新たなプロジェクト組成も実施する予定です。

関東では熊本地震に関する報道はほとんどされなくなりましたが、復興のスピードは速いとは言えません。支援団体の撤退により、これからさらに復興のスピードが落ちる可能性も十分にあります。熊本地震からの復興は、まさにこれからと言えます。

8 プロジェクトの進捗

2018年3月11日の時点で、154のプロジェクトに262名の右腕人材が参画してまいりました。参画期間（1年間）が終了した右腕人材（社会人に限定）の約70%が被災地に残り、被災地での重要な役割を担っています。



9 ご支援・ご寄付のお願い

2021年3月11日、震災から10年というタイミングに向けて、更に東北内でのチャレンジの活性化と、その自律的持続的な取り組みを支えていくために、私たちは下記の方針で取り組んで参ります。

- （1）東北オープンアカデミーを中心に、東北内のリーダー同士の学びのコミュニティづくりと、東北と都市部との希望関係人口づくりに取り組みます。
- （2）福島県浪江町をきっかけにしながら、福島浜通りの復興をサポートしていきます。
- （3）ローカルベンチャー推進協議会で連携する、岩手県釜石市、宮城県気仙沼市・石巻市、熊本県南小国町を中心に、東北や熊本内に官民連携でのローカルベンチャーを支えるエコシステムのモデルづくりに取り組みます。

本プロジェクトについては、スタート以来、国内外の個人・団体・企業の皆様より大きな関心を頂戴し、2018年3月末現在、ご寄付・助成金等の総額は 994,254,214円という多額のご支援をいただいております。

この場をお借りしまして、改めて心より感謝申し上げます。

今後の東北の復興、さらには新たな地域創生に向けた取り組みへと進化を目指していきます。

皆様におかれましては、「震災復興リーダー支援基金」のPRへのお力添えをはじめとして、事業連携や各プロジェクトへの個別のご協力など賜りますよう、引き続きよろしくごお願い申し上げます。

《ご寄付の受付》

ETIC.は認定NPO法人です。法人/個人ともに、ご寄付は税制控除の対象になります。

<http://www.etic.or.jp/kifu>

連絡先・お問い合わせ先

- ◆NPO法人ETIC.内 ローカルイノベーション事業部（震災復興リーダー支援プロジェクト）事務局
（担当：山内・押切）

東京都渋谷区神南1-5-7 APPLE OHMIビル4階

mail : fukkou@etic.or.jp Web : <http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/index.html>